

# 近代文学 4

大正文学の諸相

有斐閣双書

---

---

# 近代文学 4

大正文学の諸相

---

三好行雄 編  
竹盛天雄



\* 入門・基礎知識編 \*

有斐閣双書

---

---

## 編者紹介

三好行雄

大正15年生れ。昭和25年東京大学文学部卒業。  
現在 東京大学文学部教授。

竹盛天雄

昭和3年生れ。昭和27年早稲田大学文学部卒業。  
現在 早稲田大学文学部教授。



有斐閣双書

## 近代文学 4 大正文学の諸相

昭和52年9月20日 初版第1刷印刷

昭和52年9月30日 初版第1刷発行

編者 三好行雄  
竹盛天雄

発行者 江草忠允

東京都千代田区神田神保町2-17

発行所 株式会社 有斐閣

電話 東京 (264) 1311 (大代表)  
郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番  
本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前  
京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 藤本総合印刷・製本 稲村製本所

© 1977, 三好行雄・竹盛天雄. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価は外函に表示してあります。

## はしがき

最近の近代文学研究の盛行はまことにめざましく、卒業論文の段階でも、いささか比重を失した近代への傾斜がいわれはじめてからすでに久しい。小説家や批評家など、文壇サイドからの発言もめだつた現象となりつつある。近代文学が一箇の文学伝統として、〈現代〉を架けて問うに足る意味をようやく瞭然としてきたのであろうか。古典国文学からの相対的独立の問題をはじめ、近代文学史観の再検討、実証と論理の亀裂をめぐる方法論の再構築、新しい言語理論による表現構造論の要請など、刻下の研究者に強いられている重要な課題も多い。文学自体の概念の拡張によって、思想や政治の領域も、いやおうなく文学史（文学研究）の対象と化しつつある。

総じて、戦後に本格化した近代文学研究も三〇年を経て、明らかに重大な転換点を迎えたつある。それは研究方法の多岐な分化と混乱、研究領域の拡大と多彩化などをともなつて、ひとを一種の迷路に踏みまよわせる観さえある。迷路は、月々に量産される膨大な研究論文の数によつても象徴される。とくに研究の第一歩を踏み

だそうとする人びとにとって、氾濫する情報の渦は時として、いたずらな混沌と徒勞を強いるだけであろうし、ことは学生を指導する立場の教師にとっても同断である。

こうした時機に、評論と研究とをあわせて過去の歴大な業績に史的整理をあたえ、その到達点と残された問題を明らかにすることは、旧来の水準を越えて、近代文学研究の新たな発展と飛躍をうながすためにも必須の課題だといえよう。本シリーズは、そうした要請に応えるものとして企画されたが、従来の類書が多く踏襲してきた作家別（ないし作品別）の展望に終始することを避け、ひろく近代文学研究上の核心となるべき問題点を選択し、個々のテーマに応じた史的整理を試みている。テーマの選択は研究者の関心が深く、したがって業績の積みかさねの多い問題を主とし、同時に、研究の進展に即応した新しい課題にも留意した。個々の叙述は原則として、(一)問題の所在、(二)主要な研究業績の史的整理、(三)今後の課題・方向の指示の三点を骨子としたが、テーマによっては、それによりふさわしい叙述がなされた場合もある。

全一〇巻の構成は小説・評論を中心に、ほぼ時代の流れに沿って区分した第1、7巻と、近代および現代の詩歌を対象とする第8、9巻、研究上の重要な主題と方

法を展望した第10巻からなる。現段階で、必要な問題点はおおむね網羅したと信じるが、幸いに、多くのすぐれた研究者の協力を得て、所期の目的を充分に達しえたと自負している。

本シリーズの刊行が研究者、あるいは研究をこころざす人びとへの指針を提供し、そしてまた、ひろく近代文学の読者にとっても鑑賞・享受の一助となりうることを期待したい。最後に、編集から刊行までの過程で、有斐閣編集部、澤井洋紀・千葉美代子・林喜代子の諸氏に多大の援助を受けた。記して謝意を表する。

昭和五二年五月

三好 行雄  
竹盛 天雄

\*執筆者紹介

(執筆順)

みや	ぎ	たつ	ろう	
宮	城	達	郎	明治大学政治経済学部教授
しげ	まつ	やす	お	
重	松	泰	雄	九州大学教養部教授
あい	はら	かず	くに	
相	原	和	邦	広島女子大学文学部助教授
いま	い	のぶ	お	
今	井	信	雄	成城大学短期大学部教授
いけ	うち	てる	お	
池	内	輝	雄	大妻女子大学文学部助教授
おお	つ	やま	くに	
大	津	山	国	静岡女子大学文学部教授
にし	がき	つとむ		
西	垣	勤		神戸大学教育学部助教授
すけ	がわ	のり	よし	
助	川	徳	是	名古屋大学教養部助教授
し	みず	たか	よし	
清	水	孝	純	九州大学教養部教授
の	ぐち	たけ	ひこ	
野	口	武	彦	神戸大学文学部助教授
えん	どう	たすく		
遠	藤	祐		フェリス学院大学文学部教授
きく	ち	ひろし		
菊	地	弘		跡見学園女子大学文学部教授
なが	ひら	かす	お	
永	平	和	雄	岐阜大学教育学部教授
のぼり	お	ゆたか		
登	尾	豊		茨城大学人文学部助教授
おほ	もり	すみ	お	
大	森	澄	雄	東洋大学短期大学助教授
え	い	えい	じ	
海	老	井	英	九州大学教養部助教授
い	むら	きみ	え	
井	村	君	江	鶴見大学文学部教授
いし	まる	まさ	こ	
石	丸	晶	子	東京経済大学講師
お	がさ	お	まさる	
小	笠	原	克	藤女子大学文学部教授
やま	ざき	かず	ひで	
山	崎	一	穎	跡見学園女子大学文学部助教授
お	ぎ	ほつ	き	
尾	崎	秀	樹	評論家
せき	ぐち	やす	よし	
関	口	安	義	都留文科大学文学部助教授

目次

はしがき

1 荷風の韜晦……………宮城 達郎 1

- 「花火」の“戯作者宣言”(1) “宣言”の実状(2) “新婦朝者”荷風(3) 江戸趣味への傾斜と韜晦(4) 江戸趣味の実質(5) 花柳小説家荷風(6) 花柳小説の完成と批判(7) 韜晦への時代批判(8) 震後の荷風(9) 荷風文学の復活(10)

2 鷗外・史伝の評価……………重松 泰雄 11

- 鷗外にとって史伝とは何か(11) 同時代者の評価(13) 没後における論評(14) 戦前・戦中の動向(16) 戦後旧版全集の刊行まで(18) 史伝研究の進展(20) 今後の課題(22)

3 「明暗」と則天去私……………相原 和邦 23

- 問題の発端(23) アウトラインの形成(24) 小宮説の系譜(25) 戦



後の挑戦(26) もう一つの視点(28) 四〇年代の否定論(28) 芸術  
的方法と認識法(29) 人生論と文学論(30) 今後の課題(31)

4 『白樺』とその周辺……………今井 信雄 33

『白樺』の消長(33) 『白樺』とその時代(34) 『白樺』同人の多様性  
(35) 〈十人十色〉〈個性〉〈自我〉(36) 『白樺』の文学(37) 『白樺』  
と美術(39) 信州の白樺運動(40) 参考文献をめぐって(42)

5 直哉のリアリズム……………池内 輝雄 45

主観的リアリズム(45) 自然主義前派か(46) 昭和期の批評(47)  
戦後の批評(49) 新しい批評(50) 〈非小説〉の成立(51) 暗い認  
識(53)

6 「新しき村」の実践……………大津山 国夫 55

「村」の略史(55) 「村」評価のむつかしさ(56) 「村」の前史(57)  
「村」の提唱と批判(58) 「村」の回想、訪問記、歴史的記述(59)  
「村」論の応酬とその宿弊(61)

7 「或る女」のリアリズム……………西垣勤 63

「或る女」のわかりにくさ(63) 戦前の先進的評価(65) 本多秋五の史的評価の確立(66) 「或る女のグリンプス」による「或る女」の出發の問題(67) 「或る女」前篇における回想と幻想(69) 前後篇の屈折と連続(69) 後篇のリアリズム(71) 古藤の作中での位置(72) 「或る女」論の進展と混迷(72)

8 大正期教養派の評価……………助川徳是 74

「大正文化」の一形態(74) 竹内仁の批判(76) 『現代史への試み』の拓いた問題(78) 二、三の試み(80) 和辻哲郎研究について(82) 阿部次郎研究について(84) 反合理主義の立場(86)

9 大正文学における「西洋」……………清水孝純 87

〈新しい日本人〉の出現(87) 〈思想の病人〉(88) 漱石・鷗外のまなざし(90) 〈自然主義前派〉(91) 芥川の場合(93) 大正期の「西洋」理解(95) 自己批評の欠除(96) 象徴主義的方法意識の脱落(98) 受容か、固有性の発現か(99)

10 谷崎潤一郎・悪魔の美学……………野口武彦 101

悪魔主義者の自意識(101) 西欧文学史用語としてのサタニズム(102)

悪魔主義か偽悪趣味か(104) 悪魔主義の精神力学(105) 悪魔主義の美学(107)

学(107) 女性的な形姿の悪魔(108) 「悪」と超越(109)

11 新現実主義の意味……………遠藤 祐 111

新浪漫・新理想・新現実(111) 〈徹底〉と〈要求〉(113) 史的整理の試み(115)

戦後の諸説(116) 〈意味〉をさぐることの意味(118)

12 龍之介の方法……………菊地 弘 120

認識と創造(120) 歴史への志向(121) 虚構の意味(123) 西欧的認識と比喩の文学(125)

原点と創造の方法(125) 転換・挫折(128) 身辺的小説(130)

筋のない小説・反リアリズム(130) のこされた問題(132)

13 「父帰る」のドラマツルギー……………永平 和雄 133

近代戯曲の成立(133) 芥川の言葉(134) 上泉と湯地(135) 戦前の批評(136)

常識的な健康さと空虚な自我(137) 田中千禾夫の鑑賞(137)

作劇精神の追尋(138) 現代の受容(139)

				14
			「運命」の評価……………	登尾豊
			少ない「運命」論(141) 賞讃の例(142) 総論的評価(143) 自跋の問	
			題(145) 文体について(147) 露伴再評価の動きのなかで(148)	
		15	葛西善蔵のリアリズム……………	大森澄雄
			二種類の見解(149) 文壇登場まで(150) 友人たちの発言(151) 大正	
			期の私小説論のなかで(152) 芥川龍之介と正宗白鳥の見解(153) 矢崎	
			弾と伊藤信吉の見解(154) 吉田健一と臼井吉見の見解(155) 認識の違	
			いを正すみち(156)	
	16	宇野浩二の語りと文体……………	海老井英次	159
		問題の所在——〈文章の口語化〉(159) 〈しゃべるやうに書く〉(161)		
		〈饒舌体〉とリアリズム(162) 〈饒舌体〉の系譜(163) ユーモアとペー		
		ソス(164) 〈反語的疑問〉と〈副詞型〉(166) 今後の課題(167)		
	17	佐藤春夫の憂鬱……………	井村君江	169
		二つの憂鬱(169) 二つの成立過程と特色(171) 表現の斬新さ(173)		
		出版当時の反響(174) 個人と社会の憂鬱(176) 憂鬱と風流(178)		

大杉栄の位置

石丸 晶子

二つの問題(183) 荒畑寒村の回想(185) 大正文学史のなかの『近代思想』の位置(186) 白樺派に対する位相(187) 大杉のアナーキズム誕生の由来(188) 大正デモクラシーに対する位相(189) プロレタリア文学との距離(190) もう一度文学史の文脈のなかで(191)

私小説(心境小説)の評価

小笠原 克

私小説論の半世紀(183) 文壇用語としての「私小説」(194) 中村武羅夫の「本格小説」論(195) 久米正雄・佐藤春夫の「心境小説」論(196) 宇野浩二・芥川龍之介・青野季吉の問題把握(197) 昭和一〇年代作家のなかで(199) 平野謙の「私小説の二律背反」(200) 伊藤整の理論と実作(201) 私小説評価の可能性(203)

大衆文学の成立

山崎 一 穎

大衆文学の定義(205) 大衆文学前史(205) 大衆文学成立の原点(207) 「新講談」いわゆる「書き講談」の誕生(207) 「立川文庫」の位置(208) 「社会講談」の出現(209) 文芸の民衆化と講談の革命(210) マス・メ

ディアの発達(210) 廿一日会と第一次『大衆文芸』創刊(211) 『中央公論』誌上の大衆文学論(213) 今後の課題(213)

21 「大菩薩峠」評価の変遷……………尾崎 秀樹 215

百年のちに(215) 『中央公論』の特集(217) 谷崎の評価(218) 大宅 壮一らの評価(219) 英訳本の介山序文(221) 中谷博の説(222)

22 『赤い鳥』と童心主義の評価……………関口 安義 224

大正デモクラシーと『赤い鳥』(221) 鈴木三重吉(225) 『赤い鳥』と文壇作家(226) 『赤い鳥』周辺の雑誌(228) 童話と綴方・児童自由詩(229) 童心主義(231) 『赤い鳥』研究の課題(232)

『近代文学』全一〇巻総目次……………234

# 1 荷風の韜晦

「花火」の「戯 所与の表題に、もつとも単純明快  
作者宣言」な解答を与えようとすると、その  
契機端緒となったものは、大正八年一二月発表の随  
筆「花火」(『改造』)に示された、大逆事件に際して  
の、いわゆる「戯作者宣言」である。

(明治四十四年(注、四三年の誤り)慶応義塾に通勤  
する頃、わたしはその道すがら折々市ヶ谷の通で  
四人馬車が五六台も引続いて日比谷の裁判所の方  
へ走つて行くのを見た。わたしはこれ迄見聞した  
世上の事件の中で、この折程云ふに云はれない厭  
な心持のした事はなかつた。わたしは文学者たる  
以上この思想問題について黙してゐてはならない。  
小説家ゾラはドレフュー事件について正義を叫ん  
だ為め国外に亡命したではないか。然しわたしは

世の文学者と共に何も言はなかつた。私は何とな  
く良心の苦痛に堪へられぬやうな気がした。わた  
しは自ら文学者たる事について甚しき羞恥を感じ  
た。以来わたしは自分の芸術の品位を江戸戯作者  
のなした程度まで引下げるに如くはないと思案し  
た。その頃からわたしは煙草入をさげ浮世絵を集  
め三味線をひきはじめた。わたしは江戸末代の戯  
作者や浮世絵師が浦賀へ黒船が来やうが桜田御門  
で大老が暗殺されやうがそんな事は下民の与り知  
つた事ではない——否とやかく申すのは却て畏多  
い事だと、すまして春本や春画をかいてゐた其の  
瞬間の胸中をば呆れるよりは寧ろ尊敬しやうと思  
立つたのである。

戦後クロイズ・アップされたこの「宣言」を最初

に問題としてとり上げたのは、おそらく故片岡良一氏の「永井荷風と近代作家の「類型」」(『近代日本の作家と作品』昭14・11、岩波書店)中であろう。氏はこれに対し「取上げたい問題を終に取上げさせなかつたのは時勢の圧力であり、それに負けた自分への羞恥は氏の鋭い自意識であり(略)同時に「世の文学者と共に何も言はなかつた」の一句其他に、周囲への鋭い皮肉と冷罵が罩められてゐたのではないか」と論じている。氏はこれの書かれた昭和一三年という暗い時代であつて、自身の抱く問題と、圧殺されようとする熱情とを、荷風の内に投影したのもあつたらうが、はたして「花火」のこの回想が、額面通りに受け取れるか否かという事には、もとより疑問が多い。

すなわち吉田精一氏が説く「文学者たることを恥ぢる」ことと、「戯作者的態度をとる」ということの間には飛躍がある。ここに夾まるのは自らの嗜好であつて「花火」の荷風の述懐は文字通り受け取るべきではあるまい。それ以前から濃かつた江戸芸

術や思想への傾倒に、更に一層深入りする一つの踏み段として、大逆事件が役立ったというのが、どちらかといへば正しい解釈に違いない(『永井荷風』昭46・2、新潮社)という妥当な見解がある。

### “宣言”の実状

いったいこの述懐が書かれたのは大正八年であり、大逆事件に隔たること九年の後である。しかも荷風は「花火」の最後をへ目に見る現実の事象は此年月耽りに耽つた江戸回顧の夢から遂にわたしを呼覚す時が来たのであらうか」と結んでいる。すなわち彼は、第一次大戦終戦記念日の街頭に、労働者のデモを目撃したことから、〈動しがたい時代の力と生活の悲哀〉とを実感するような心的状況下にあつたのであり、自身の壮年時代の好尚の推移を、前述のように正当化するとも思われる言葉で、半ば自身に肯定させようとしたのではなかつたかと思われる。

その傍証として、彼は明治四二年九月二十七日、滝田栲蔭にあてた書簡中に「小生は故意に時代と反対するわけにては無之、個人性を基礎とする近代文芸



## 1 荷風の船晦

一般の傾向によりて、単に自己の感情を歌ひパレードックスの思想的遊戯を喜ぶものに候へば、社会の改革者流と誤解されるのも残念に有之、成りたけ物議を引き起すまじく心掛け居り候」と書いている。

しかし未だ問題がある。それはここで、ゾラのドレフェウス事件が引かれていることである。周知の通り荷風はその青春期において、熱烈なゾラの信奉者であった。そしてゾライズムの作品『地獄の花』（明35・9、金港堂）では、ブルジョア家庭、教育者、宗教官などの偽善と腐敗、また墮落をめぐり、欲望のみにくさを暴露している筆鋒の激しさに、ゾラの社会主義にも通う青年荷風の客気が発揮されていた。したがってこの「宣言」中に、かつてのゾライストの余燼を発見することは不可能ではない。「宣言」が問題とされた戦後、対談集『荷風思出草』（昭30・7、毎日新聞社）中で、聞き手の相磯凌霜氏が「若い時の赤がかった考え方は、一種のはしかみたいいもんですね」と駄目を押し、荷風にこれを「伝説」と認めさせているのは、もとより妥当ではあるまい。

### 「新婦朝者」荷風

話を前に戻し、アメリカでの約四年、フランスでの約一年の外遊を終えた荷風が、明治四十一年七月帰国してからの数年間の活躍は、じつに華華しいものがあつた。婦朝みやげ『あめりか物語』（明41・8、博文館）に対し、自然主義の側から与えられた「濁らない」ピュアな自然派の態度と云ふのはかうもあらう（相馬御風「新書雑感——『あめりか物語』」『早稲田文学』明41・10）という評価は、たしかに当時の荷風の位相を示していた。すなわちその虚無的世界観と放胆率直な表現、また生物的な人間観などは自然派と共通していたが、いっぽう華やかな色彩と情感の氾濫、虚無と寂寞の悲哀を耽美享楽の情調によってうずめようとする志向などは、自然主義には見られぬ新鮮な魅力であり、オアシスの出現として文壇と読者に迎えられた。荷風の作品には自然派の持たぬ官能的抒情の表出と陶酔、美に対する絶対的な評価があつたのである。

以後一年余り、荷風は文壇の期待に応えて多彩な作品を発表する。五年振りて接する故国の自然への